

# 暮らしの中 で紅葉を愛でる

日本の秋を象徴する紅葉は、私たちの暮らしのなかにさまざまな形で取り入れられています。照り葉をリビングに生けたり、美術や工芸のなかに秋を感じたり、テラスでカエデを育てたり……。この秋、小さな紅葉狩りを楽しんでみてはいかがでしょうか。



夏櫛  
砂張花入  
ナツハゼ

夏櫛の実には赤や黒や緑が混在してひと房をなし、ことのほか美しい。口の欠けた砂張には落としを入れて用いている。その欠けた部分から照り葉が出るイメージで。

# 花材選びが何より大切 照り葉の入れ方を教わる



これほど見事な実がついている夏櫨は初めてだと小林さん。実が美しく下がるY字形の枝が気に入ってこの大きな枝を求めた。その枝に別の赤みが際立つ枝を取り合わせるイメージで。まず気に入りの枝を花入に入れ、もう一つの枝の葉を整理して添え、あとは余分な葉を見極めて落とす。

照り葉とは紅葉した葉が美しく照り輝いていること。茶花ではこの呼称を好んで用います。今回は茶席で花を入れることが多い小林厚さんに、暮らした秋の彩りを添える花の入れ方を教わりました。茶花では照り葉は竜胆や野菊、椿などの添えに多く用いられますが、照り葉を主役にすると思いがけない美を発見することもあります。それには何を置いても枝ぶりのよい、好きな枝を見つけることです。いい花材に出会うためには、日頃から心がけて自分の好きな花を置いている生花店を見つけ、なじみになることも大事です。なじみの店では好きな枝、おもしろい枝を選ばせてもらえるからです。



## 小林 厚 こばやし あつし

1964年、兵庫県生まれ。大阪の老舗古美術商「谷松屋戸田商店」に勤務。世界的なプリミティブアートのコレクターである稲葉京氏と出会って花に目覚め、7年間師事する。店主・戸田博氏のプロデュースもあり、茶花から自由花まで自在に扱う。

それに合わせてイメージを描き、花材を選ぶので、「花材を選んだ時点で八割がたは終わっている」と小林さんはいいます。そしていい花材に出会えば、花材が助けしてくれるともいいます。今回の夏櫨はその好例といえるでしょう。

### 「家庭画報.com」で、 生け方のポイント動画が見られます

小林 厚さんによる生け方のポイントレッスンを特別に動画で公開中です。QRコードを読み込んでいただくか、URL(<http://www.kateigaho.com/>)にアクセスしてご覧いただけます。





## いかに余白をつくるか。 それが花を美しく見せる要点

枝ものを入れるとき、核になる一本がとても大事だと小林さんはいいます。最初の一本がきれいに入るとあとは楽に入れられるというのです。いかにイメージを実現する枝を選ぶかに尽きるのでしよう。

一方で目の前にある花材に対処していく柔軟さも必要です。今回は照り葉が主なので、小林さんは最初、取り合わせに実ものをイメージしました。ところが夏櫛も七竈もそれ自体に見事な実がついていたので、結果的には一種で入れること

に。楓は上に伸びる枯れた枝を見つけたことで、まっすぐに立つ形となりました。小林さんが最も心を砕くのは、いかに余白をつくるかということでした。「どこに、どのくらいの余白をつくるか。難しいんですが、これが美しく見せる要点なのでいちばん気をつけています」。そのため必要と思うもの以外の葉はすべて落としていきます。そうすることによって軽々とした姿になり、照り葉の美しさを強調できると思うからです。

### 七竈

ナナカマド

#### ルビニヤック焼締花入

十五代樂吉左衛門作

照り葉と山芍薬の実を低く入れるイメージだったが、七竈一種で照り葉の枝と、実をつけたやや緑みを残す枝との取り合わせになった。このように同じ花材でも枝ぶりや取り合わせで入れ方は大きく変化する。



### 楓

カエデ

#### 白磁筒花入 黒田泰蔵作

真ん中にひゅーりと伸びた枯れ枝がおもしろくて、一種で入れるべくこの枝を選んでみる。このような円筒形の花入の場合には口の中央にまっすぐに立てることでバランスよく、美しく見える。

(左ページ)右上・枯れ枝がおもしろいので選んだ2本の枝。右下・足もとの枝を落とし、枯れ枝を生かして花入の中心に立てて入れてみる。高さがたりないので枝をたし、花留めで固定。花入の縁にかからないことが大事。左上・あとはひたすら葉の整理を。まず重なっている部分を落とす。左下・どの葉を残すかを吟味して落としていき、完成。

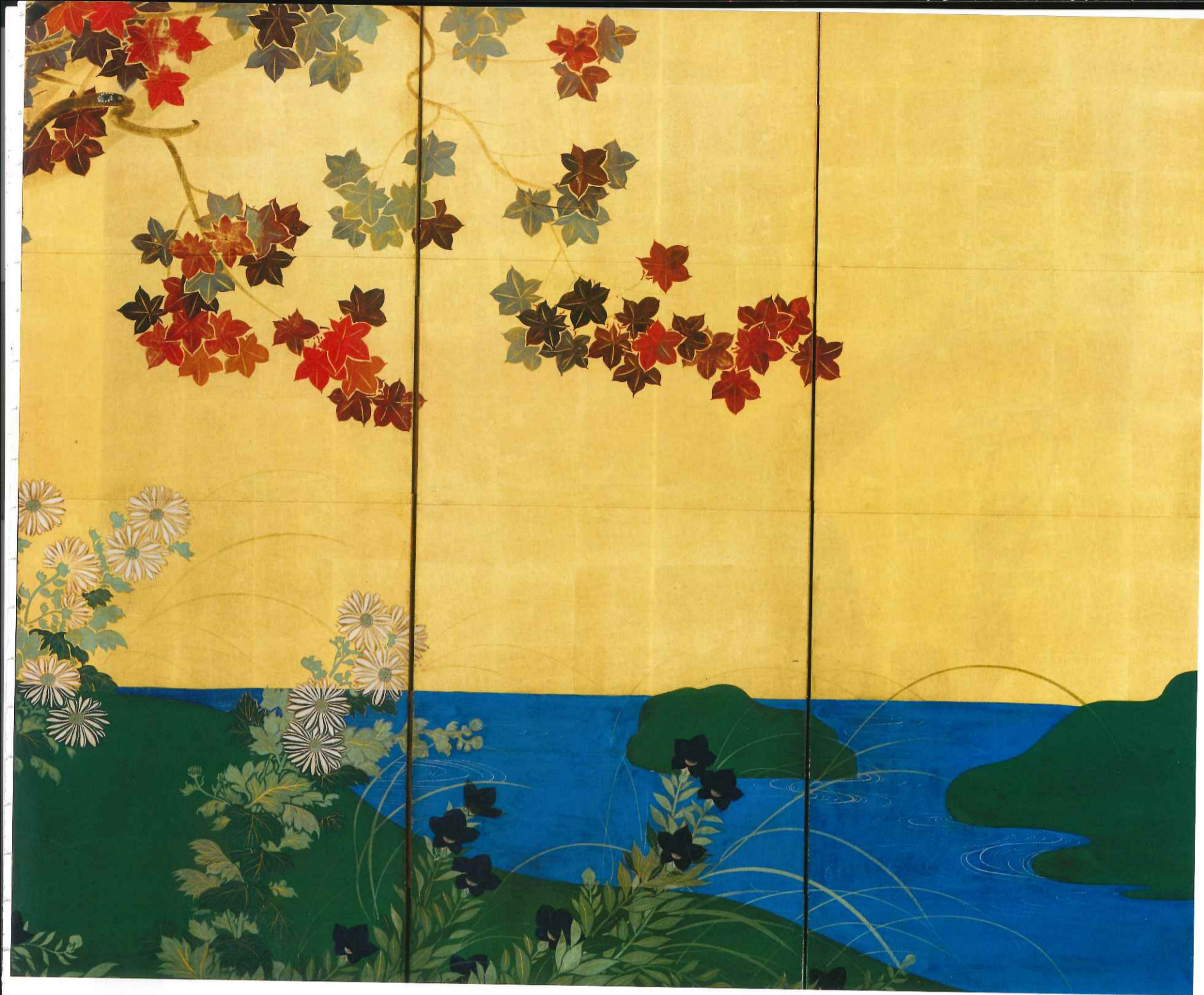


根元の太い枝を鋏でわり、生ける枝の足もとを挟む。枝の足もとが飛び出すことで安定する。

上・七竈は紅葉した枝と、やや緑みを葉に残す実のついた枝とを選んでみる。いくつかの枝を入れてみて、取まりのよい枝を用いる。下右・実のついた枝は少し矯めて、実も整理する。下左・赤い葉の枝を高く入れ、実のついた枝を添えるように入れる。枝の足もとをすっきりと見せることが要点。







# 美術・ 工芸品に宿る、 紅葉の魅力

秋を代表する意匠の一つとして、日本人に愛されてきた「紅葉」。長い歴史のなかで、当時の人々が感じた紅葉の美は、さまざまに形で表現され、現在に残っています。

ここでは江戸時代以降の美術・工芸品のなかから、日本人の暮らしや感性を映し出す名作をご紹介します。

秋季の楓、春季の梅——  
四季の移ろいをあでやかに描いた屏風

〈四季花木図屏風〉

鈴木其一 江戸時代  
屏風・六曲二双(各二三・八×三二・八・八センチ)  
出光美術館

色づいた楓をはじめ、白菊、桔梗、水仙といった秋冬の草花が描かれた左隻。楓は紅葉だけでなく、緑葉、黄葉、褐葉と多彩に色めいている。右隻(左ページ下)には、紅白梅や牡丹など春夏の草花が描かれ、四季の移ろいを見事に表現している。出光美術館で十一月五日まで開催中の「江戸の琳派芸術」展にて展示中。





紅葉の鮮やかな赤色が  
男女の情熱的な愛情を表現

### 〈愛染〉

川端龍子 一九三四年 屏風・二曲一隻（六八・二×二六八・五寸） 足立美術館

仏教用語で男女の愛欲を意味する「愛染」を、見詰め合うつがいつがいの鴛鴦うんおうで表現した作品。写実性と装飾性を一体化させた傑作で、水面に浮かぶ鮮やかな紅葉が、愛の高まりを表すかのような印象。足立美術館で十一月三十日まで開催中の「秋季特別展」にて展示中。



建築金具に凝縮された、  
七宝による錦秋の美

### 〈七宝楓文引手〉

江戸中期 一〇・五×九・二寸 細見美術館

襖の引手をはじめとする建築金具からは、当時の優れた技術と造形感覚が読み取れる。本作は、楓の形をした引手。銅胎の表面に境界の銅線を設けず色釉を配置することによって、微妙な色の混ざり合いを作り出す「無線七宝」の技法を用い、緑、黄、赤が混ざり合い、楓葉の紅葉する様を見事に表現している。細見美術館で十月九日まで開催中の「麗しき日本の美―秋草の意匠―」にて展示中。

吉祥の仙獸・鹿とともに  
いきいきとした筆致で描かれた紅葉

〈色絵鹿紅葉文鉢〉左

一七九〇〜一八二〇年代 口径二四・七センチ  
高さ二〇・五センチ 底径二・〇センチ

〈染付鹿紅葉文皿〉右

一六七〇〜九〇年代 口径三二・三センチ  
高さ三・三センチ 底径一四・二センチ  
ともに佐賀県立九州陶磁文化館  
柴田夫妻コレクション

江戸時代の有田焼に描かれた紅葉は、古典を題材  
にしていたり季節の変化を表現していたりと、さ  
りげなく遊び心のあるデザインが特徴で、当時の  
人々の教養や繊細な季節感が感じ取れる。延命長  
寿の象徴である吉祥文・鹿は、秋の意匠として紅葉  
と絡めて描かれた。ともに佐賀県立九州陶磁文化  
館にて展示中。



優美な蒔絵で表現された  
葉の色の緻密なグラデーション

〈紅葉蒔絵香包形香合〉

明治時代 径一〇・九×八・〇センチ 高さ二・三センチ  
静嘉堂文庫美術館

黒漆塗りの地に蒔きほかして淡く濃淡をつけ、金・  
銀の高蒔絵、金具の技法を用い、楓が葉先から紅  
葉してゆく風情を、朱漆を用いて表している。中  
央を紐結びにした香包を模しており、緻密な細工  
は底裏にも施されている。

静嘉堂文庫美術館イメージサイン / DNPart.com

